

# もののふ

戸部良一

西洋史には「軍事革命」という興味深い概念がある。論者によって、その定義や、革命が始まった時期について若干の論争があるのだが、この概念を用いて壮大な世界史を描いたジェフリー・パーカーによれば、①イタリア式築城術による対攻城砲要塞の発展、②火縄式のマスケット銃の登場と斉射戦術の採用、③兵力の急激かつ持続的な膨張、などが「軍事革命」の主な内容であり、16世紀に始まったとされる。「軍事革命」は軍事技術や軍事組織の変革にとどまらず、膨大な兵力を造成し維持するために、徴税の仕組みや国家の財政制度を根本的に変え、やがて国家そのものの性格をも変質させてゆく、というのがこの解釈のミソである。

ここで、こんな小難しいことを書き出したのは、ほかでもない、②の斉射戦術を世界で最初に使ったのが織田信長だ、とパーカーが言っていることを紹介したいからである。マスケット銃は強力な武器であったが、先込め式だったので、弾を込めるのに時間がかかり、そこを襲われると

どうしようもなかった。そこでオランダ人は古代ローマの兵法書からヒントを得て斉射戦術を編み出した。要するに、銃隊を何列かの長い横隊にし、第1列が撃ち終わったら最後尾に回り、第2列が前に出て撃つ。これを何列かで繰り返すのが斉射戦術である。ところが、オランダ人がこれを実践する20年も前に、信長は長篠の合戦で既に実行していた、とパーカーは述べている（大久保桂子訳『長篠合戦の世界史』）。

長篠の戦いについては、その後、日本でも研究が進んで、信長はそれほど画期的な戦術を採用したわけではない、という説も出てきたようだが、その当否を論じる力は私にはない。ただ、注目したいのは、パーカーが正解したにせよ誤解したにせよ、当時の日本の武士団がパーカーにそう考えさせるだけの革新性あるいは合理的精神を持っていたことである。今日的に言えば、イノベーションに秀でていたとも言えようか。いま、われわれが武士や侍について思い浮かべるイメージとは、どこかちょっと違う。

武士や侍についてのわれわれのイメージは、江戸時代の武士団に由来しているのかもしれない。封建時代の特権階級で、気位ばかり高く、守旧的であり、ときに頑迷固陋。たしかに長く続いた戦乱の時代が終わって江戸時代に入ると、大船や大砲の建造を禁じた幕府の政策もあって、日本の軍事技術は現状を維持するだけ、というよりも退歩した。200年以上も続く平和な時代にあって、武士は戦闘者ないし軍事官僚から次第に行政官僚化していった。文人と呼ばれる、やや形容矛盾の武士も少な

くなかった。武士は統治エリートであるだけでなく、教養の面でもエリートであったと言ってよい。

ただし、戦闘者としての本質も失わなかったようである。幕末期に、黒船来航を軍事的危機ととらえ、西洋列強に激しい敵愾心を燃やしながら、その先進的な軍事技術・科学技術を進んで摂取・導入したのは、政治エリートとしての武士が本質的に戦闘者であったからだ、とはよく言われることである。戦闘者としての武士はプラグマチストであった。彼らはまた、屈辱に耐えながら、無謀な戦いは避けるというリアリストとしての側面も持っていた。西洋の衝撃に対する対応が日本と中国・朝鮮とはかなり異なるが、その理由の一部をそれぞれのエリートの性質の違いに求める見解には説得力がある。

ちょっと話は飛ぶけれども、日露戦争開戦時の陸軍首脳の生年を調べたことがある。陸軍大臣、参謀総長、教育総監、それから数人の軍司令官。当然だが、全員、明治維新前（天保、弘化、嘉永）の生まれである。みんな、正規の軍事専門教育は受けていない。一部が速成教育を受けただけである。大げさに言えば、日露戦争時の陸軍のトップは、軍人というよりも武士であった。むしろ、これはトップだけで、ミドル・レベルは違う。開戦時の参謀本部の5人の部長うち4人が陸軍士官学校卒。30人の旅団長のうち7人が陸士卒であった（大江志乃夫『日露戦争の軍事史的研究』）。日露戦争は、トップの武士をミドルの軍事プロフェッショナルが支えて戦ったと言えよう。

日露戦争後やがて日本軍はトップもミドルも軍事プロフェッショナルで構成されてゆく。それ自体は、不可避的かつ不可逆的な趨勢なのだが、この趨勢の進行とともに日本軍は変調をきたす。なぜだろう。その要因のひとつは、軍事プロフェッショナル養成の過程で、武士が持っていた大事な何かを棄てたことにあるのではないだろうか。明治以降の軍人たちは、自らを侍の後裔であるとし、往時の武士を鑑として自らを律した、と一般には考えられている。だが、それは武士であることを衒っただけだったのではないか。

彼らは、真の意味での武士的教養、あるいは革新を追求する合理的精神、リアリストの気概のようなものを棄ててしまったのかもしれない。